

『オチが言えない”テラカワメイシン”』

櫻木 祐宏 さくらぎ まさひろ

(昭和 33 年 11 月 7 日生まれ)

昭和 46 年国東町立国東小学校卒業

昭和 49 年国東町立国東中学校卒業

昭和 52 年大分県立国東高等学校卒業

昭和 56 年九州大学法学部卒業

1. -1 わたしが「彼」に初めて会ったのは 12 歳の春、中学校の入学式のあとクラスに戻って席についた時である。
出席番号が終わりのほうだった「彼」はわたしの右斜め後ろのほうでニコニコしていた。いや、もしかするとニコニコしていたわけではなく、生まれついてそういう顔をしていたのかもしれない。産婆さんに間違えて顔を踏まれたのか、目鼻や口の位置というかパーツパーツがニコニコしているように歪んで付いていて、顔の造作がはじめからそのような形になっていた。
クリクリッとしていて可愛くて、ちょうど「もののけ姫」に出てくる「木霊」のようだった。
- 2 不景気が 10 年以上も続く昨今、人々の生活は全般的に苦しくなって人心が乱れ、昔では考えられないような痛ましい事件が頻発するようになった。
世の中全体が世知辛くなって殺伐とした雰囲気や霧気が周りを覆う。
知らず知らずのうちにせせこましい考え方をする人間だらけになり、他人の幸せは妬んだりやっかんだりして、寧ろ他人の不幸をこそ喜んで自らの慰めにするような、本当に仕様も無い人間ばかり増えてきた。
そんな時ふと「彼」の顔を思い出すと、「あっ、アイツが居た。そうだ、アイツが居たんだ。」とホッとする。「彼」のニコニコに(別にニコニコしているわけじゃないのだが)、ちょっと会ってみたい、眺めてみたいと思う。会って別に話があるわけじゃないのだけれど、なんとなく顔を見たいのである。
「彼」を一言で言うと、「絶対に悪いことが出来ないひと」である。
何でそんなことが分かるのか、と言われてもちょっと困るが、何故か「彼」だけは絶対に悪いことが出来ない、不思議なことに断言できるのだ。
2. -1 さて、大分空港というのは地方空港のなかでも指折りの不便な空港だそうである。
なにしろ県庁所在他の大分市からは別府湾をグルリと回った先にポッカーリと離れている国東半島の、更にかかり入ったところにコブのようにくっ付いて建設されていて、バスで行くと 1 時間以上、別ルートだとホバークラフトという喧しい乗り物でブォオーンッと海を渡ってやっと辿りつくという、何とも現在のスローライフでいきましょう、を先取りしたような感じになっている。
国東半島というのは、九州本島から出べそのように出っ張った形の、言わば本格的な老舗の陸の孤島で、古くは修験道のメッカだったり、都の罪びとが流されてきた

り、落人が隠れてみたり、また一方では奈良平安朝以来の古い仏教文化を神仏習合の形で今に残す珍しい場所である。

古典の授業で習うような昔の言葉も方言として残っていて、土地の爺さん婆さんなどは「そりじゃーちこそ、あれ」などと係り結びを日常平気で使っている。

だいたい大分県そのものが九州の田舎なのだが、その大分県の中でも屈指の大田舎である国東半島の、そのまた更に大分空港からもっと奥へ、車で10分ほど入ったところに黒津崎という大変に風光明媚なまさに白砂青松を地で行くようないい感じの海岸の集落がある。

「彼」はその黒津崎で腕のいい大工の棟梁の次男坊として生まれ、わたしはそこから更に5分ほど行ったところにある街の一角で育った。だから「彼」のことは小さいときは知らなかった。

-2 わたしは、国東小学校 → 国東中学校 → 国東高校と、小中高一環教育を受けた。何か慶応幼稚舎のようなことを言っているが、田舎町のことなので他に選択肢がなかったのだ。

「彼」はわたしの隣村の生まれなので、わたしとは小学校が違う。小原小学校というほんに小さな小さな小学校からクリクリッと上がってきて中学校で同じクラスになったというわけだ。

それでも昔のことなので、まだ田舎にも子供が大勢いて中学校は1学年5クラスあって、高校では6クラスもあった。1クラス40人~45人ほど居たと思う。

わたしは小さいときからの野球少年で「彼」はテニス部だったから、特別くっ付いていたという記憶はないのだが、なんとなくいつも一緒にいて仲が良かった。

毎年クラス替えが行われてシャッフルされるのだが、何故か「彼」はいつもなんとなく一緒だった。

3. -1 それはそうと、わたしの親父はどうも学校の教師をしていたようだった。「ようだった」というのはこういうことである。

わたしは小さい時に親父が平日何をしているのかがよく分からなかった。というのも、わたしが小学校に出かけるときには前夜遅く帰ってきた親父はいつもまだグーグー寝ていて、わたしが出かけたあと働きに出る、一方夕方にわたしが小学校から帰って風呂に入って飯を食って寝付いて相当経ってから、親父は夜遅くに一杯飲んで帰ってきて寝る、という感じで、平日に起きている親父に会った記憶がほとんどないのである。

土日家を出て働いていることが多く、何か勤め人のようだが、どこに勤めているのかもよく分からなかった。

母親に聞けばよさそうなもんだが、尋ねて納得した記憶もない。とにかくわたしは飯を食って遊んでいれば良かったのであろう。牧歌的というより牧歌そのものの国東半島の奥で、わたしはよく言えば大変のびのびと素直に、しかしながら世情浮世のよしなしごとには全く触れることもなく関心もなく、要するにポーッと暮らしていたわけである。

- 2 明治日本は、近代化を急ぐにつれ全国に順次学校を作っていた。いろいろなタイプの官立の学校が出来て、ここに行くと国から多少お金が出たそうである。昔の陸軍士官学校や海軍兵学校などがそれで、旧制の師範学校もそうだった。大分にも明治の随分前から旧制師範学校が出来ていて、国は地方にも施設を作って「多少の金もやるから志のある者は学校に行け」、ということをやったのである。「二十四の瞳」に出てくる女先生の大石先生も師範学校出のバリバリ新任教師ということで、洋服を着て自転車に颯爽と乗るハイカラ先生として登場してくる。これが瀬戸内の小豆島で昭和一桁台の話である。
- 3 ところで、わたしの母方の爺さんという人が苦勞人で、どういう事情か詳しくは知らないが、この旧制師範を出て田舎に帰り、若い頃から校長先生を務めて地元の人から慕われていたそうである。残念ながらわたしが1歳のときにこの爺さんは亡くなって今は詳しい話は分からない。その頃の小豆島とドッコイドッコイの国東半島の奥地では、それこそ師範出のバリバリ先生は少なかったろうと想像されるころであるが、その爺さんもはじめから教育者を志して師範に入ったわけでもなさそうなのである。経過は大きく四捨五入するが、要するに就職も思うようにいかず、かと言って百姓一本で生きていく土台もなく、幸い多少頭もあるというので、学校に行こう、それも金を貰えるところが良い、という具合で、まあ言ってみれば不純な動機で先生になったわけだ。しかし流石というか何というか、明治生まれの人だけに、なってみると爺さんは教育者として立派な人格者だったようで、今でもわたしが国に帰ると土地の人から爺さんの話をよく聞かされる。
- 4 その爺さんが戦後そう経っていない頃、ある学校で校長をしているときに、これまた山出しグリグリ完璧田舎青年で師範を出た若手教師がその学校に赴任してきた。話を聞くと自分とよく似た境遇で、要するに不純な動機で教師になったようである。眼ばかりギョロギョロしているが骨はありそうだが、というので自分の次女と見合いをさせて結婚しとけ、ということになった。明治の人格者が聞いて呆れる話なのだが、そのグリグリ田舎青年もまた輪をかけていい加減で、その見合い1発で結婚を決めて、2回目にその娘に会ったのは何と結婚式当日だった。見合いの時に見合い相手の娘の横に兄弟姉妹が何人か座っていたが、結婚式当日の今日、自分の隣に座って三々九度をやっているのは果たしてあの時の見合い相手だったか、その姉妹だったか定かでない、しかしまあどれでもいいか、ということで結婚しているのである。その、ものすごくいい加減なグリグリ青年田舎教師がわたしの親父で、見合い当日に果たして相手だったかどうか定かでない娘がわたしの母親である。今、年をとった母親からは「お前はいい加減だ!」とよく怒られるし、人からは「櫻木さんはアバウトな性格ですね。」とお褒めいただくのだが、そりゃ当たり前の話で、

わたしの場合出生の経過からして極めてアバウトなのだ。

その親父も 20 年以上も前に若死にして今は断片的にしか事情はわからない。

どうも、後から聞いた話を繋げていくと、わたしの親父はそんなこんなで若いときから、組合専従に推されてみたり、行政に出たり、また県教育庁の指導主事だったり、学校の現場から遠ざかっていた時期が長かったようなのである。

- 5 話が長くなったが、その親父が、私が初めて「彼」に会った時、つまりわたしが中学校に上がった時に現場の学校に復帰し、あろうことか何と同じ中学校に転勤してきて、しかも自分の息子と同じ 1 年生の担任になったのである。

「ガビーン!!.....。ウッソーでしょう!?!」 わたしは絶句した。

何で楽しい楽しい中学校にウチの親父が勤めることになってんのよ!?

それも隣のクラスの担任ですと!?! ちょ、ちょっと待っておくんないよ、親分さん。そんじゃわたしの中学校生活はいったいどうなるんですか!?

それよりも何よりもウチの親父は、薄々は気づいていたが、やっぱり先生だったのか!?! だいたい何の科目の先生なんだろう? ああの飲兵衛が同級生に教えることができるのか!?

自分の中学生生活も心配だけど、親父のほうは大丈夫なんだろうか!?!.....。

司馬遼太郎によると、高田屋嘉兵衛は独り立ちして家を出るとき「11 歳にもなって(恥ずかしくて)親の飯が食えるか!」と言って菜の花の咲く故郷淡路島を後にしたそうだが、わたしは 12 歳にもなって親父の商売を知らなかったのである。

それはさて置き、中学校の入学式で壇上に転勤してきた新しい先生たちの中に親父が並んで立っているのを見て、ガビーン! となって青ざめてクラスに戻ったときに、わたしは「もののけ姫」の木霊のニコニコに会った、ということで冒頭の話に繋がるのである。

4. -1 その後「彼」とは不思議な縁で、長い付き合いが続いた。とにかく今から 20 年ぐらい前まで、つまり互いにわたしたちが 25 歳になるくらいまで、わたしと「彼」は人生のほぼ半分をなんとなく一緒に過ごすことになったのである。

「彼」とわたしが、そのときの人生の約半分=12 年余りを何となく一緒に過ごしたということは、ずっとあとになってから、ある時同窓会か何かの集まりのときに「彼」が言った言葉で確認できたのだが、こういう話である。

「彼」は、「俺はお前の親父に習ったことがない。」と言うのだ。

- 2 わたしの親父は前述のとおり、同じ中学校の同じ学年の担任で、国語と社会と習字を教えていた。

そしてそのまま持ち上がって遂にわたしは修学旅行も親父と一緒にいく羽目になったのだが、一方、いくら田舎の中学校とは言え、親父が実の息子を直接教えるのは具合が悪かろう、ということで、わたしがいるクラスだけは国語も社会も習字も別の先生が受け持っていた。

しかし 3 教科もやっていて、毎年 5 クラスをシャッフルしていると、同級生のほぼ全員が必ずいずれかの学年で何らかの科目を親父に習った、というのがごく自然な

成り行きである。

したがって、世間によくあるパターンで卒業後に教え子が久しぶりに恩師の家を訪ねるということをわたしの同級生たちがやる場合、恩師である親父の家を訪ねると、そこには何故ということもなく同級生のわたしが住んでいるという妙な関係が発生した。

その親父が急逝したために、こんにちになってわたしが中学校の同窓会に行くと、親父の分と自分の分と2回挨拶をすることになってしまっている。

- 3 ところが、「彼」はこう言うのである。「俺はお前の親父には習ったことがない。」
ということは、「彼」はわたしと中学校の3年間ずっと同じクラスだったということだ。だからわたしを教えることがなかった親父は「彼」もまた教えていないのである。そのことが確認できたのである。

5クラスあって毎年シャッフルしても、3年間ずっと同じクラスというのはかなりの少ない確率だろう。

しかし、わたしと「彼」の不思議な縁は、更にもっと少ない確率を突破してその後も続くことになるのである。

同じ高校に進んだことも一定の確率を超える計算になるが、田舎町なのでそれはせいぜい1/2程度のものだった。

しかしながら、その高校でもまたまた最初から一緒のクラスに配属されたのである。1年5組になって、恐る恐る右斜め後ろを振り返ってみたら、果たして「彼」は居た。3年前と同じく、クリクリッとニコニコと、・・・要するに「木霊」はまたしても右斜め後ろに座っていたのだった。

- 4 高校は6クラスあってここでも毎年シャッフルされたが、1年も一緒、2年も一緒、そして結局3年間とも「彼」はわたしと同じクラスだった。

もうこの頃にはわたしと「彼」の不思議な関係は知る人ぞ知る怪談として、また艶談としてサワサワと伝えられていった。

さすが国東半島は仏の里である。これはもう奈良平安朝以来の仏教文化が色濃く残る国東半島六郷満山の御仏が成せるありがたい一不思議なご利益、超常現象に相違ない。下手に逆らうとエライことになるで、という話になった。

大学受験することになって、皆「ああでもない、こうでもない。」と言いながら、思い思いに各方面を受験し、田舎の少年たちはそれぞれに青雲の志を抱いて全国に散らばっていった。

そして、わたしと「彼」と言うと・・・、学部こそ違え両方とも同じ九州大学に入ってしまった、相変わらずの怪しい関係は、霊験あらたかな国東半島から福岡市へ持ち込まれたのであった。

それにしてもどうしてこういうことが続くのだろうか？ いったいどれくらいの確率を突破したことになるのだろうか？

もはや確率どころの騒ぎではない。なにしろ霊験ですから。

とにかかくにも、わたしと「彼」は引き続きなんとなくいつも一緒であった。

- 5 そして更にその1年後、大学2年になった時・・・、遂にわたしと「彼」はひとつ屋根の下に暮らすことになった。
断じて申し上げるが同棲したのではない。わたしがオカマで「彼」と愛し合っていたのでもない。
2年になる時に、いつものように何となく「彼」と一緒に新しい下宿を探しに行ったところ、手ごろな安い下宿があったので、借りようかと相談していたら、「2部屋を一緒に契約して貰いたい。」と大家さんに言われて、「ゲッ！・・・・・・。」と顔を引きつらせていたら、「どうしますか？」と言うので、わたしと「彼」は一瞬お互いに顔を見合わせたが、「じゃあ、お願いします。」と言ってしまったのだ。
戦争でも焼け残った学生街の古い一戸建ての2階で、ちょっと怪しげな共同生活ともお隣さん同土とも言うべき生活が、その後3年も続いて、わたしと「彼」は同じ下宿から社会人となっていった。
- 6 今から考えると、そうは言ってもやはり「彼」はいつもニコニコしていたように思う。そうは言ってもというのは、「彼」は意識的に本当にニコニコしていたということだ。もともとの顔の造作だけのせいではなく、という意味である。
わたしは極めてアクの強い人間で、わたしと始終一緒に居ると相手は草臥れて大変である。
今、わたしのカミさんがそう言うのだから間違いない。
「彼」もさぞかし大変だったろうと、今更ながら感嘆するやら、驚愕するやら、「彼の」忍耐と懐の深さに感謝することしきりである。
何しろこの時点で、12歳の頃以来丸10年間なんとなく一緒にいたわけだから、これはもう単に「見飽きた」などという生易しいものではない。普通の神経なら「もう勘弁してください。」というところである。
わたしは、始終ひっきりなしに喋りまくる喧しい性格で、しかもネチネチとしつこい。モノには執着するし、拘りは人一倍。どうでもいいことを10倍にも広げて論じる割には肝心なことには極めてアバウトだ。要するにズンダラである。
その上に、ものすごい文句言いの人間であり、その文句を聞いてくれる聞き役が周りにいないと困るという、全く手の掛かる厄介な人間である。
「彼」はその意味では極めて優れた聞き役を務めてくれていたと思う。
いや、もしかするとはじめから全く聞いてなかった、頭に響いてなかったのかもしれない。
何にしてもよくもまあ、わたしのような脂っこい人間の傍で10年も居て、神経を病まなかったものだと、今から考えると驚異の乾電池である。
やはりどう考えても「彼」は神経が体の隅々にまでは行き渡っていなかった、としか思えないのだ。
何しろわたしの記憶では、「彼」はやはりいつもニコニコしていたのである。
- 7 わたしは、学生時代も今と同様尖がっていて、始終いろいろアチコチぶつかっていた。そのたびに隣に居る「彼」の部屋へ容赦なく入り込み、ベラベラと議論を吹っかけていた。

「彼」はその都度ニコニコと、時には泣きそうになり、また半分眠りながら付き合ってくれたものだ。

「彼」がいつも右斜め後ろに居るといった感覚があって、その意味でわたしは背水の陣を敷く、ということも免れていたのかもしれない、という気がする。

国の同じ高校から九大と一緒に近くに住んでいた悪友たちもしょっちゅう我々の下宿に来て、わたしと同じように「彼」の部屋に入り浸っていた。

「彼」は何か特殊能力を持っていたわけでもないし、仙人でもない。ごく普通の人間で喜怒哀楽も普通にある。顔が多少歪んでいていつもニコニコしているだけだ。

しかし何故か「彼」としばらく話していると、なんとなく「まあ、いいか。」という気分になるのも確かではあった。 実に全く不思議な効能であった。

-8 いや、よくよく考えたらひとつだけ際立って不思議な能力が「彼」にはあった。

これはもう誰にも真似ることが出来ない極めて特殊な技能である。

それは、「彼」だけが面白いと感じる話ができる、というものである。自分で喋っついて自分が一番先にウケるのだ。

自分で話したことに誰よりも先に「ワハハ・・・」と大笑いして、気がつくとも周りはポカンとしている、誰もが今か今かと話の結末を期待して「彼」の話の続きを待っているのに、そのままオシマイになってしまう。本人だけが満足。

分かりにくいかも知れないが、要するに彼の話には大抵いわれるオチがないのである。みんな消化不良になってしまっ、「そいで?」と聞くと、「ん? そいだけじゃ。面白からうが!？」と言って更に自分だけ笑うのである。

面白いと膝を打って笑う人がよくいるが、「彼」も胡坐をかいた膝を両手で打って自分だけ笑う。それも実に満足した顔でニコニコとやってくれる。

我々は「彼」のところに集まっっては、いろいろな話をするのだが、「彼」もその都度話に加わっってノッてくる。友達の話におおいにノッて、それじゃ今度は自分もと、話を始めようとするのだが、諸事タイミングの悪い「彼」はなかなか自分の話を割り込ませることができない。

いつも誰かに先に話されて、自分の出番を作れない。普通だったら「こら、ちょっと待て! 俺にも喋らせろ!」と眼を剥くところだが、「彼」の場合は先を越された人の話にいつの間にか釣り込まれて大いに笑っているという感じなのである。

まったく、人が良いと言うかなんと言うか。

そんな「彼」に気を使って周りが促すと、「ああ、そうじゃった。」と話始めようとするのだが、この時点で既に「彼」は自分がさっき話そうとしていた話題を忘れている。その忘れてしまったこと自体に、自分で取り合えず一旦笑っついて、それでも何とか一生懸命話題を思い出してひとしきり喋る。

みんなその話の結末を聞き漏らすまいと、最後に一瞬の静寂が生じる。みんな今度こそはと、「彼」の口に注目しながら「そいで、どげなった?」と彼に聞く。

「彼」はキョトンとして、「そいだけじゃけんどが。」と当然のように言って、また自分だけ笑うのだ。

「この馬鹿タレが!」と「彼」をボコボコにして、それを2時間ばかり繰り返していると、何となくみんな元気になって帰っっていくのである。

そしてまた、何日か経って頃合いが来ると集まっては話をするのである。

-9 何という効能であろう!!

いつまで経っても結論もオチもない話を聞いて、怒るところかまた「彼」と話したいといって人が集まるというのは、世間広しと言えどもお釈迦様以来の大人物として考えられない。

「彼」自身が、どうしても自分の話はオチない、ということなんとなく自覚しているフシもあった。ほんの時々だが、今日の話はちょっと違うぞ、と周りの関心確かめるように膝を乗り出して話し始めることもあったのだ。もちろん、それでオチた試しは一度もない。

社会人になってみんな全国に散らばってからは、同級生が年に何回も集まるということは難しくなった。それでも盆と正月には帰省している者同士が、思い思い声を掛け合って田舎の居酒屋に集まるということをよくやっている。その当座最初7~8人集まった時点で「彼」は居ないことが多い。

これで全部だ、ということで飲み会が始まってしばらくすると、誰かが「彼」が居ないことによやく気が付いて、「あっ、アイツを呼んでなかったじゃないか!?!」ということで慌てて電話をする。

すると「彼」はおもむろにやってきて、相変わらずニコニコとしながら、「おう!」と部屋に入ってくる。

それでみんなが既に出来上がっているのを見ると、急いで追いついて、またまたオチのない話を始めるのだ。

もう最近では、「彼」のオチのない話はわれわれ同級生のあいだでは一種のお宝というか、名物のひとつに成っていて、たまに「彼」の話に結論があったりすると、却ってブーブー文句が出る。

昔はその地域で、本当に有難いことじゃ、と世間から慕われた人間は、生きているうちからその家に鳥居が立つ、と言われていた。生き神様と崇められるのである。案外「彼」は本当に「木霊」なのかもしれないと、最近は思ったりもするのである。

-10 同じ釜の飯を食う、という言葉がある。

クラブ活動で一緒だったとか、わたしと「彼」のようにひとつ屋根の下で暮らして生活を共にした、ということをごとういう言い方で表すのだが、わたしの場合も「彼」と同じ釜の飯を食った期間が2年間ある。

正確には、「「彼」と同じ釜の飯を食った。」のではなく、「「彼」の(同じ)釜の飯を食った。」である。

「彼」は大学時代、珍しいことにフィールドホッケー部に入っていた。毎日グラウンドを走り回るもんだから夕方にはものすごく腹が減るのだろう、学食の飯だけでは足りなくなったのだ。

そこで「彼」は田舎の母ちゃんに言って自分の家で作っている米を送らせて自炊することにした。

自炊と言っても、おかずから何から作れる才覚は無いので、晩飯だけ電気釜でポツコリと炊いて腹を満たそう、という魂胆だった。

一応学食で取り合えず何か適当に食っては来るのだが、夜9時ぐらいになると「彼」はまた飯を炊くのである。それも毎日五合も炊いていた。

ラーメン丼にワサッとゆっくり飯をよそうとちょうど一合ぐらいなので、五合と言うとその五杯分だ。

わたしはと言えば、特に本格的なクラブ活動をやっているわけでもなく、「彼」ほどには腹は空かないのだけれど、毎日非常に良い匂いが漂うものだから、頃合いになると、自分の空の丼と箸だけ持って「オーイ、出来たか!?!」と「彼」の部屋に上がりこみ、夕飯を掻っ喰らうのである。

「彼」は「おう、出来た、出来た。」と非常に嬉しそうに一緒に飯を食わせてくれた。嬉しそうにというのは、「彼」は毎度毎度やっているうちに飯を炊くのが上手になり、その飯炊きの腕前が上がっていくことがとても嬉しかったようだった。

おかずはほとんど無い。

ただひたすら飯だけを黙々と食うのだが、上手に炊けた飯はそれだけでも本当に旨い。カピたパンなど当たり前のように食っていたのでこの炊きたては非常に旨かった。

それでもちょっとだけ工夫をして多少のおかずを用意するようになった。スタンダードなメニューはまず一杯めは、卵を割って醤油と一緒にぶっかけて食う、二杯目はキムチを少々食う、わたしはその二杯の二合で終わり。「彼」は更に三杯めを塩とかフリカケなどで食う。二人で五合食い終わるのに5分と掛からなかったと思う。「彼」の五合炊きの電気釜を囲んで毎日の晩飯は本当に楽しかった。

だからわたしの場合は、「彼」と同じ釜ではなく、「彼の釜」の飯を食っていたのだ。

それもタダで2年間も! 「彼の釜」の飯なのだから、同じ釜であることは言うまでもない。

これといって手伝うこともないわたしが、炊きあがった頃に丼だけ持って現れるのに、「彼」は文句を言うどころか、それこそニコニコと「おう、早く来い。」と実に嬉しそうに飯を食わせてくれた。

私も時々、マグロ缶など当時としては大変なご馳走を差し入れることもあった。

5. -1 そうこうしているうちに、やがて二人とも遂に卒業ということになった。

わたしも「彼」も偶然に大手金融機関に就職が決まった。しかし今度こそは別々の会社だったので、下宿を引き払うときには、不思議にも怪しかった長い腐れ縁を互いに懐かしんで、それぞれの武運長久を祈りつつ別れたものだった。

別れた後、「彼」がゴールキーパーでホッケーのボールが顔面を直撃して、しばらくの間目の周りがパンダみたいになっていたことなどを思い出して、ジーンとしながらも思い出し笑いしていた。

-2 わたしは東京本店の銀行に入ったので、しばらく東京で新人研修を受けたが、最初の配属地は何とついでこの前まで住んでいた福岡の支店だった。ほんの1ヶ月お江戸に居ただけでまたまた福岡に舞い戻ったというわけだ。

「彼」は大阪本店の銀行に入ったので、たぶん大阪で研修を受けて、今頃はその辺り

に住み着いているだろうと思いながら、ある日わたしの就職先の銀行の独身寮があった西鉄春日原駅のホームに立っていたら、反対側のホームにどこかで見たような歪んだ造作の顔がこちらを見ているではないか!

ゲッ! 「なしか!?! なし、わい、こけおんのか!?!」 (何故!?! どうしてお前がここに居るんだよ!?!)

わたしは思わず5mしか離れていないのに大声で叫んだ。

「おう!」 紺色のスーツを着た「木霊」は、相変わらずニコニコしていた。

「彼」もまた研修終了後に福岡支店に配属されてきたのだと言う。そして「彼」の独身寮も同じく西鉄春日原にあったのだ! それもわたしの寮のすぐ裏手に立っていて、僅かに20m程度しか離れていなかった。通勤するときもまたまた一緒になってしまった。

「ソゾーッ!」 「なな、なんと、霊験あらたかというのはかくも恐ろしいものなんでしょうか!?!」

何ごとかを悟ってしまったわたしは、生活に掛かる引き落としの銀行口座を自分の銀行ではなく、「彼」の銀行に作ったりした。

- 3 その後「彼」は2年ほど福岡に勤務して、やがて東京に転勤していった。

この時24歳~25歳になっていたが、わたしと「彼」はこの時点で人生の半分を色濃く一緒に過ごしたことになる。

転勤して間もなく「彼」が結婚することになって招待状が来たので、田舎に帰ったが、そのときの披露宴がまた凄かった。正午に始まった宴は延々と夕方まで続き、東京から来た「彼」の銀行の支店長は予定の飛行機どころか最終便にも乗れず、大量の祝い酒の中で沈没していった。

とにかく「彼」の故郷の黒津崎あげての地域のお祝いだから、両家の披露宴だけで終わるはずがなく、今度は実家で近所の人たちが待ち構えていて、前にも増した大宴会が繰り広げられた。

大工の棟梁である「彼」の父ちゃんは本当に嬉しそうに、「あっそれ、打一ちましょっ!!」と、国東半島名物の「打ち込み」をあちこちで披露して祝い酒の中に沈没していった。

「彼」は顔をクシャクシャにして(もともとクシャクシャだったが)、それでも何か格好良かった。

- 4 披露宴の土曜日が過ぎて、翌週福岡の職場に戻っていたら、突然「彼」が奥さんを連れて店に現れた。これから新婚旅行に行くのだと言って、わざわざ御礼に寄ったという。

「ちょっと待て、今日はもう水曜日じゃないか!?!」 聞けばあの後、日曜日と月曜日は黒津崎の地元のお祝いが続いて、昨日の火曜日は今度は福岡の奥さんの実家でお祝いがあった。それも済んだのでやっと今日新婚旅行に行くのだと言う。

元々歪んだニコニコ顔は、お祝いの酒やら何やらで、もはやムクんでいたが、「彼」はわたしの手を握って、何度も「おおきに、おおきに。」と言った。

空港に向かう新婚夫婦を見送ったが、「彼」らの後姿はヨレヨレだった。

-5 その後1年ほどしてわたしも東京に転勤になり、再び「彼」と今度は時々飲むようになった。

同じ高校を出た仲間と一緒に飲むのだが、大分料理を食わせる店に開店と同時になだれ込んで大分弁丸出して閉店まで居座る飲み会を何度もやった。

「彼」は実に楽しそうで、始めは「もう、すっかりシティーボーイじゃ!」と言ってはニュアンスやイントネーションが非常に怪しい東京弁を使っているのだが、ものの10分もしないうちに、中学校で初めて会った時の素の状態に戻っていた。

素の状態に戻るということは、例のオチのない話が出てくるということである。しかしこれが出ないことには「彼」が来ている意味が無いわけであるから、悪友どもは「彼」をボロクソに言いながらも「彼」の話を珍重した。

-6 それにしても何故「彼」の話には結論やオチがないのか？

みんな、はじめは不思議がり、そのうちイライラして、最後は「そういう奴なんだ。」「アイツにオチを望むほうが悪い。」で無理やり納得している。

じゃ、どうして「彼」と酒を飲みたいのか？

なんで田舎に帰ったときに、「彼」が参加しないと田舎に帰った気がしないのか？ずっと気になっていたのだが、10年ほど前から俄かにその理由が分かってきた。

つまり「彼」は言ってみれば国東半島の風景そのものなんだ。見たまんまなんだ。景色そのものだから、見たまんま、知っていることはすべて惜しみなく出し尽くすんだ、と。

ここでこういう仕掛けをしておいて、あとでビックリさせてやろうなどとは決して思わない。だから、今知っている情報はすべて話の順番関係なく出し尽くす。相手の出方を計算しながらこちらの手駒を使おう、そうすることで最大の効果があがる、などとは夢にも考えない。

ここでこういう前フリをして、こう転じておいて、こういう風に展開して、オチはこうやろうとか、小利口な策略など、はじめから全くない。

・・・「ピュア」なのである。それも恐ろしいくらいに「ピュア」である。

要するに、「企む」ことがまったくないのである。

恐らくこのややこしい実社会の中で、物事を企めない「彼」が過ごしてきた数十年はわたしたちと同様に、決して楽しいことばかりではなかったはずだ。

寧ろ目端の利いた世渡り上手にはいいようにやられていたのではなかろうか？などと余計な心配をしたりもする。

わたしたちはこんにち、多かれ少なかれ他人も自分も欺かなければ生きていけなくなっている。

そんな世知辛い仕様も無い世の中になって、「彼」の存在は際立って貴重なものに見える。

「彼」が絶対に悪いことが出来ない人間だと、よく理由も分からないのにわたしが断言できるのはきっとこれなんだろう、と思うようになった。

世の中が殺伐としてきて、自分のいる社会をよくよく見つめたとき、それなりに年齢も重ねて自分の来し方行く末を考えたとき、自分の才覚で一生懸命智謀を巡らし

たつもりでも、どうしても世の中の深遠さに呆然として、思わず空を見上げたとき、故郷の山や海を思い出すように「彼」の姿が妙に懐かしいのである。「彼」のハナから企みの無い話はそれだけに新鮮で、あの頃の自分、色が着いていなかった頃の自分、前途に希望も未来もあってどういう人生がこれから開けるのだろうとキラキラしていた頃の自分を、・・・・・・ピュアな自分を、思い出させてくれて、何やらホンワカとしてくるのだ。何てたって、「木霊」は清浄な森にしか棲んでいないのだから。

6. -1 あれから 20 年近く経って、わたしがいよいよ勤めていた東京の銀行を辞めて九州に戻ることにした時に「彼」は送別会を開いてくれて、自分の電車がなくなるといふのに飯田橋の駅をいつまでもいつまでも着いて来て別れを惜しんでくれた。昔から仲が良かった連中の中で「彼」とわたしだけが大手金融機関に入ったのに、今回わたしが業界を先に抜けるというのは「彼」にとっても感慨が一入あったようだった。
- 朴訥が服を着て歩いているような「彼」はそういう肝心なときにもうまく喋れない。何か言いたいのにどうしても言葉が見つからない、気持ちを伝えられない。結局「彼」はその時も、わたしの方が「こら、元気でやれよ。」と言ったのに対して、「おう。」とニコニコするのが精一杯だった。「彼」らしい、とても良い見送りをして貰ったと深く記憶している。
- 2 そんな「彼」、寺川明伸（てらかわあきのぶ）氏は旧三和銀行の溜池支店長や蕨支店長を歴任し、現在UFJ銀行青山支店でリテール業務の責任者をしている。メガバンクの経営統合で大変な激務を背負って忙しい毎日を過ごしていることだろう。
- あれだけ怪しかった腐れ縁も最近はトンとご無沙汰になり、なかなか思うように会えなくなった。
- それでも田舎に帰って昔の同級生たちと飲むと、「彼」、寺川本人がその場に居ないのに必ず話題に上って、皆からあのオチのない話を懐かしがられている。親しみを込めて「メイシン、メイシン」と呼ばれるこの畏友は、長年ニコニコし過ぎた為に今では目尻にクッキリと笑い皺が刻み込まれて、千と千尋の「河の神」のように一段と神々しくなってきた。
- 例のオチない話はご託宣のようになっている。
- お互いまだまだ働かないといけない年で、今度いつ会えるかわからないが、油断しているとヒョンなところでまたまた腐れ縁が復活するかもしれない、・・・・・・霊験で。
- その時は夜陰に乗じて、「彼」の門先に鳥居でも立てといて知らぬ顔をしてやれ！と思っている。